CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

研究ノート

打叩速度とパーソナリティ

朴沢　一郎・松井　匡治・片岡　彰
日下　正一・長谷川　啓三・鈴木　敏明

Ⅰ．はじめに

仙台大学は昭和41年11月設置認可され翌年4月宮城県柴田町の旧海軍火薬廠跡地に開学し体育学部だけの単科大学として発足した。

男女共学であるが男女の比率は毎年ほぼ，9：1である。学生数の推移を見ると，

	S46	47	48	49	50	51	52	53	54
志願者	82	92	132	209	259	449	533	547	688
在籍数	294	276	300	396	526	715	810	883	943
卒業生	53	86	54	69	50	60	91	126	150
体育心理専攻	19	19	26	21	31	49	64	76	71

体育心理学専攻学生数は，昭和54年4月現在3年次生25名，4年次生46名，計71名である。卒業論文作成にあたり学生が選んだテーマ別にその関心の所在を区分して竝べてみると，

(イ)　スポーツマン的性格に関するもの
(ロ)　スポーツ種目の興味に関するもの
(ハ)　ゲームにおける「あがり」に関するもの
(ニ)　試合運びの心理に関するもの
(ホ)　心理療法に関するもの(自律訓練法など)
(ヘ)　各種テストに関するもの
(ト)　子どもの発達に関するもの
(チ)　その他（原理・論説など）

等の項目をあげることができる。勿論これらには運動生理学・体育社会学の領域でとり上げられるものは含まれていない。ここでいう体育心理学は主として日本体育学会で伝統的にとり上げてきた専門領域分野別にもとずくものである。

ところで最近になって，Tグループの研究とか要求水準の研究等の社会心理学的アプローチがようやく注目されはじめたようである。

Ⅱ．スポーツマン適性とパーソナリティ

パーソナリティ研究の一つの方法として「要求水準」を実験的に測定していこうという研究が J. B. Rotter らによって進められてきている。Rotter は "Level of aspiration as a method of studying personality (J. soc. Psychol. 1945)" において，「要求水準」の実験場面の反応の全体像を考察することによって，劣等感や不適応感など個人のパーソナリティ特性にかなりの程度迫ることができることを報告している。日本でも，津田通夫，朴沢一郎などが「要求水準」とパーソナリティとの関連について考察を進めてきている。朴沢は「体育系学生と要求水準（日本グループ・ダイナミックス学会第26回大会，1978)」で，タッピング作業をもちいて「要求水準」を測定し，体育系学生のパーソナリティの問題を考察した。この報告に使用されたデータは仙台大学の3年次の「体育心理学実験」の中で得られたものであり，同一被験者に対し種々の心理検査（向性検査，内田クレペリン検査，Y—G性格検査，スポーツマン的性格検査）を実施してある。今回は，それらのデータを用い「要求水準」とパーソナリティとの関連を考察したものを報告する。筆者は，その中で特に「スポーツマン的性格検査」との関係について報告する。

花田らによって作成された「スポーツマン的

性格検査」は40項目の評定尺度による質問紙検査であり120点以上がよりスポーツマン的性格を持つとされている。この「スポーツマン的性格検査」の得点と「要求水準」の各測度との相関をとった結果，理想水準における遂行数（タッピングの実験事態の一つ）と達成差（予想数と遂行数の差）との2つの測度間にわずかながら相関がみられた。これは，自分をスポーツマンらしいと評定する者ほど，ダッピング作業の遂行数が少なく，達成差は大きくなるという関係である。

この結果の解釈として，まず被験者の実験事態に対する「構え」の問題として考えることが可能であろう。つまり，実験課題にいいかげんな構えを持つものは，スポーツマン検査についてもあまく評定し，理想水準の作業においてもそれほど真剣にとりくまないため遂行数も少なくなる。さらに，自分の運動能力の評価が甘い者は達成差も当然大きくなるであろう。

以上，「スポーツマン的性格検査」と「要求水準」との関係をある程度見ることができたが，「スポーツマン的性格検査」が実際に運動適性の何を測定しているのか，また「要求水準」の実験事態の整備などをふまえない限り，「要求水準」とパーソナリティとの関係が十分に確められたといえる段階ではない。これらは今後の課題として残されている。

＜参考文献＞

花田敬一他「スポーツマン的性格」（1968）

＜参　考　資　料　A＞

表1　スポーツマン的性格検査項目

被評定者氏名

項　　目	もっとも強く感じる		普通		まったく感じない
(1) 指導性がある	5	4	3	2	1
(2) 誠実である	5	4	3	2	1
(3) 公正である	5	4	3	2	1
(4) 正義感が強い	5	4	3	2	1
(5) 社交性がある	5	4	3	2	1
(6) 礼儀正しい	5	4	3	2	1
(7) 遵法の精神がある（規則を守る）	5	4	3	2	1
(8) 協同的である（協調心がある）	5	4	3	2	1
(9) 責任感が強い	5	4	3	2	1
(10) 勇気がある	5	4	3	2	1
(11) 忍耐力がある（ねばり強い）	5	4	3	2	1
(12) 努力主義的である	5	4	3	2	1
(13) 決断力がある	5	4	3	2	1
(14) 自主独立性がある（自主的である）	5	4	3	2	1

項　　目	もっとも強く感じる		普通		まったく感じない
(21) 実践的である	5	4	3	2	1
(22) 慎重である（注意深い）	5	4	3	2	1
(23) ものごとに熱中する	5	4	3	2	
(24) ものごとが正確である	5	4	3	2	1
(25) 健康的である	5	4	3	2	1
(26) 安全感がある	5	4	3	2	1
(27) 体に自信を持っている	5	4	3	2	1
(28) 持久力がある	5	4	3	2	1
(29) 生き生きしている	5	4	3	2	1
(30) ものごとに精力的である	5	4	3	2	
(31) 動作が機敏である	5	4	3	2	1
(32) 節制心がある	5	4	3	2	1
(33) 単純である	5	4	3	2	1
(34) 明朗である	5	4	3	2	1

(15)	意志が強い	5	4	3	2	1	(35)	あっさりしている（くよくよしない）	5	4	3	2	1
(16)	自制心がある	5	4	3	2	1	(36)	楽天的である（のんきである）	5	4	3	2	1
(17)	活動的である	5	4	3	2	1	(37)	感情が安定している	5	4	3	2	1
(18)	積極的である	5	4	3	2	1	(38)	落ちつきがある	5	4	3	2	1
(19)	競争的である	5	4	3	2	1	(39)	素直である	5	4	3	2	1
(20)	ものごとを気軽におこなう	5	4	3	2	1	(40)	思いやりがある	5	4	3	2	1

Ⅲ．打叩速度の実験

仙台大学体育心理学実験における単元「要求水準」の履習の過程にタッピング（打叩作業）による遊戯的競争場面を設定し感情水準の変化について数量的検討を進める。

実験の方法

◦ 第Ⅰ実験（52・5・26～52・6・23）

＜対象＞　仙台大学3年次学生　（男）68名
（女）10名

＜教示＞　(A)現実水準「1分間にどれくらい打叩できるか？」先ず10秒間の練習によって予測値を出して，それから実際に実験者の合図に従って打って実際値を記入しなさい。

(B)　理想水準「2分間にできるだけ多く打叩しなさい」4人1組のチーム間の競争をリレー式に行います。先ず各自の予測値を現実水準の値と考慮して決め，競技出番も4人の協議によって決めなさい。では実験者の合図に従って1番手から始めます。

◦ 第Ⅱ実験（53・5・25～53・6・29）

＜対象＞　仙台大学3学年次学生（男）100名
（女）11名

＜教示＞　(A)　現実水準　第Ⅰ実験と同じ。

(B)　理想水準「1分間にできるだけ多く打叩しなさい」このグループの中で最も多く打叩したものには賞品つまりトップ賞を与えます。各自全力を出してやってみなさい。先ず各自の予測値を立てなさい。4人1組編成でやりますが出番以外の3人は仲間を大いに声援して差し支えありません。では実験者の合図に従って1番手から始めます。

(C)　期待水準「1分間に最適速度でどのぐらい打叩できるか？」つまり自己のペースをつくるよう試みなさい。始める前に現実水準，理想水準等の試行結果を参考にしながら各自のペースの予測値を立てなさい。では実験者の合図に従って1番手から始めます。

(D)　最低水準「1分間にゆっくりした調子で確実に打てるのはどれぐらいか？」この作業は(C)の期待水準の試行の前に経験させた。予測値を予め立てさせた。（(D)の結果はこの報告データからは除外してあります。）

○グループの編成

◦ 第Ⅰ実験

グループ別	〔1〕	〔2〕	〔3〕	〔4〕	〔5〕
実験日	52・5・26	52・6・2	52・6・9	52・6・16	52・6・23
員数	（男）13（女）3	（男）13（女）2	（男）14（女）1	（男）15（女）1	（男）12（女）3
上位者	上 ⑤⑧	上 ③⑩	上 ①⑥⑦	上 ⑩	上 ②④⑨
下位者	下 ②③	下 ①⑤⑥⑦	下 なし	下 ④⑨⑨	下 ⑧

◦ 第Ⅱ実験

グループ別	〔1〕	〔2〕	〔3〕	〔4〕	〔5〕	〔6〕
月　日	53・5・25	53・6・1	53・6・8	53・6・13	53・6・22	53・6・29
員　数	(男)14　(女)5	(男)20　(女)0	(男)16　(女)0	(男)15　(女)3	(男)19　(女)0	(男)16　(女)3
上位者 下位者	上 ⑤ 下 ⑦	上 ①②③⑨ 下 ①	上 ⑥ 下 ②	上 ⑥⑧ 下 ④	上 ③ 下 ③④⑨⑩	上 ⑩ 下 ⑦

○結果の整理（上位・下位・女子グループ一覧）

◦ 第Ⅰ実験

理想水準順位	男子上位		男子下位		女子全員	
	理想水準	現実水準	理想水準	現実水準	理想水準	現実水準
(1)	885 (+285)	419 (+ 49)	614 (+144)	310 (− 10)	825 (+113)	389 (+ 9)
(2)	852 (+222)	429 (+ 91)	612 (+ 92)	320 (± 0)	797 (+217)	375 (+ 15)
(3)	851 (+151)	423 (+ 33)	609 (+139)	313 (+ 13)	792 (+322)	353 (+ 73)
(4)	843 (+ 83)	412 (+ 52)	605 (+ 54)	301 (− 99)	741 (+ 61)	382 (− 56)
(5)	836 (+336)	394 (− 56)	599 (+164)	309 (− 11)	726 (+ 26)	372 (+ 92)
(6)	834 (+134)	417 (+ 17)	582 (+152)	290 (+ 10)	706 (+156)	346 (+ 46)
(7)	825 (+245)	391 (+ 41)	575 (− 35)	329 (+ 19)	703 (+103)	363 (+ 23)
(8)	822 (+322)	391 (+ 9)	569 (+ 39)	282 (− 18)	690 (+240)	352 (− 45)
(9)	796 (+176)	365 (+176)	450 (− 70)	352 (−128)	665 (+135)	290 (− 40)
(10)	784 (+ 84)	415 (+ 15)	450 (+ 50)	326 (−274)	634 (+134)	305 (− 55)
↓ 平均 (N=10)	↓ 832.8 (+203.8)	↓ 405.6 (+42.7)	↓ 566.5 (+72.9)	↓ 313.2 (−49.8)	↓ 727.9 (+150.7)	↓ 350.0 (+6.2)
* 同上の½	416.4 (+101.9)		283.25 (+36.45)		363.95 (+75.35)	

*（注）2分間作業には疲労その他の要因が加わるので，½がそのまま1分間作業の実際ではない。

◦ 実Ⅱ実験

理想水準順位	男子上位			男子下位			女子全員		
	理想水準	現実水準	期待水準	理想水準	現実水準	期待水準	理想水準	現実水準	期待水準
(1)	486 (+86)	382 (−118)	430 (+30)	347 (−13)	348 (−12)	334 (−6)	389 (+19)	364 (+4)	326 (+26)
(2)	470 (+70)	396 (−4)	374 (+24)	346 (−4)	330 (−50)	219 (−61)	381 (−9)	358 (+18)	406 (+46)
(3)	457 (+87)	444 (+84)	416 (+6)	345 (−5)	341 (+11)	349 (+9)	376 (−4)	355 (+5)	371 (+21)
(4)	457 (+77)	417 (+37)	462 (+62)	342 (−8)	316 (−34)	329 (+29)	371 (−49)	358 (−42)	346 (−4)
(5)	455 (+5)	404 (−46)	339 (−21)	342 (−18)	342 (+42)	292 (+12)	371 (+71)	346 (+66)	356 (+66)
(6)	452 (+32)	417 (−33)	321 (+21)	334 (+24)	312 (−58)	337 (+27)	368 (−32)	353 (+103)	330 (+30)
(7)	452 (+52)	433 (−17)	440 (+13)	332 (−68)	345 (−15)	381 (−39)	368 (−32)	380 (+20)	402 (+22)
(8)	451 (+51)	409 (+19)	346 (+46)	332 (−18)	311 (−89)	315 (+5)	356 (+56)	328 (+94)	317 (+17)
(9)	442 (−8)	429 (+17)	420 (± 0)	310 (−40)	301 (+1)	309 (+29)	322 (−28)	335 (+5)	326 (+16)

(10)	436 (+36)	418 (+58)	428 (+68)	292 (−32)	292 (−68)	294 (−6)	321 (−4)	330 (−50)	320 (+40)
	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	3↓	↓
平均	455.8	414.9	397.9	332.2	323.8	315.9	362.3	350.7	350.0
ズレの平均	(+48.8)	(−0.3)	(+24.9)	(−18.2)	(−27.2)	(−0.1)	(−1.2)	(+22.3)	(+28.0)

結果の考察

概略推定できる事項を列記すると

(イ) 第Ⅰ実験の結果から，いずれのグループにも理想水準と現実水準の作業値の間には有意の相関が見られるが，相関度の低いグループには下位者が多く含まれている。

(ロ) 理想水準の第Ⅰ実験の2分間作業と第Ⅱ実験の1分間作業との比較は男子においては不確定であるが，女子においては，個人競争の場合よりもチームリレー競争の方が作業値が大きく，予測値とのズレも結果がかなり上回っている。

(ハ) 第Ⅱ実験の現実水準については，男子の上位と下位には相違がみられ，上位群では予測値と作業値が殆んど合致しているが，下位群では結果が予想をかなり下回っている。

女子グループにおいては，競争場面では結果と予想にズレがなく，現実水準では男子下位群と対照的に結果が予想を上回っている。

Ⅳ．性格類型と要求水準

1．目的　競争場面における要求水準の実験結果（とくに目標差，達成差）とＹＧ性格検査による性格類型の関係を検討する。

2．方法　(1)被験者；仙台大学の学生78名（両データが取れた者のみ）

②　手続き；①要求水準に関する実験（打叩検査器によるタッピング）

A）現実水準—まず10秒間の練習に基づいて1分間にどのくらい打てるかの予測値を出し，その後にタッピングを行なう。

B）理想水準—賞品獲得の競争場面においての予測値と実際値を出す。

②　性格類型の調査（ＹＧ性格検査による）。

3．結果と考察

(1)それぞれの性格類型に属する被験者の作業量，目標差，達成差について平均値の差の検定を行なった結果

Table 1.

	n	作業量 m	作業量 SD	目標差 (D-score) m	目標差 (D-score) SD	達成差 m	達成差 SD
A類	16	381.4	27.5	6.4	29.2	6.3	35.9
B類	21	358 5	26,2	33.4	40.1	−11.7	46.0
C類	7	384.0	26.1	6.7	24.1	0.1	35.6
D類	28	381.7	29.4	19.2	32.9	− 6.7	39.8
E類	6	358.3	31.3	15.0	11.0	21.2	29.1
A型	15	578.8	26.5	4.9	29.5	7.2	36.9
B型	7	356.4	28.1	37.9	50.3	− 8.1	60.1
C型	4	395.8	22.1	−11.8	3 7	21.3	23.6
D型	17	384.2	23.5	16.4	32.1	− 7.2	44.1
E型	3	368.7	22.1	11.3	5.7	20.3	36.8

Table 2.　類間の平均値の検定

	A	B	C	D	E
A		** / n.s.	n.s. / n.s.	n.s. / n.s.	n.s. / n.s.
B	n.s. / n.s.		* / n.s.	n.s. / n.s.	n.s. / n.s.
C	n.s. / n.s.	n.s. / n.s.		n.s. / n.s.	n.s. / n.s.
D	n.s. / n.s.	n.s. / n.s.	n.s. / n.s.		n.s. / *
E	n.s. / n.s.	n.s. / n.s.	** / n.s.	n.s. / n.s.	

型間の平均値の検定↗　上段；目標差　下段；達成差

（註）** 5％水準で有意
　　* 10％水準で有意に近い

①　目標差については，A類とB類の間に有意な差（$p<0.05$）が見られ，B類の目標

差，すなわち現実水準における実際値と理想水準における予測値の差が大きいことを示している。また，性格の型のみでみた場合には，C型（C，C′）とE型（E，E′）の間に有意な差（$p<0.05$）があり，C型においてはE型とは逆にマイナスの目標差があらわれている。

② 達成差，作業量については差は見られない。

(2) 競争場面における要求水準の設定ということから作業量の高低という要因が密接に関連しているだろうと予想されるので，次に，作業量と目標差の両軸間に各被験者の性格類型をプロットした相関図表を作成した。

① 平均作業量では各類型間には差はないが，分布図をみると作業量の高い領域（400以上）には，Dが多く分布している。（18名中10名）。

② 目標差が＋50以上の者は12名存在する

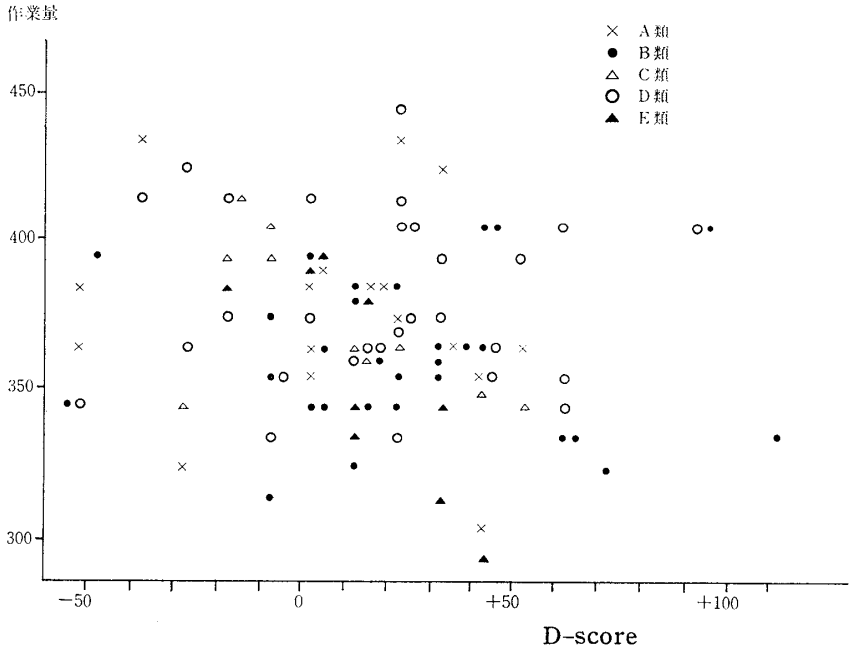

Fig. 1.　作業量・D-score と性格類型の分布

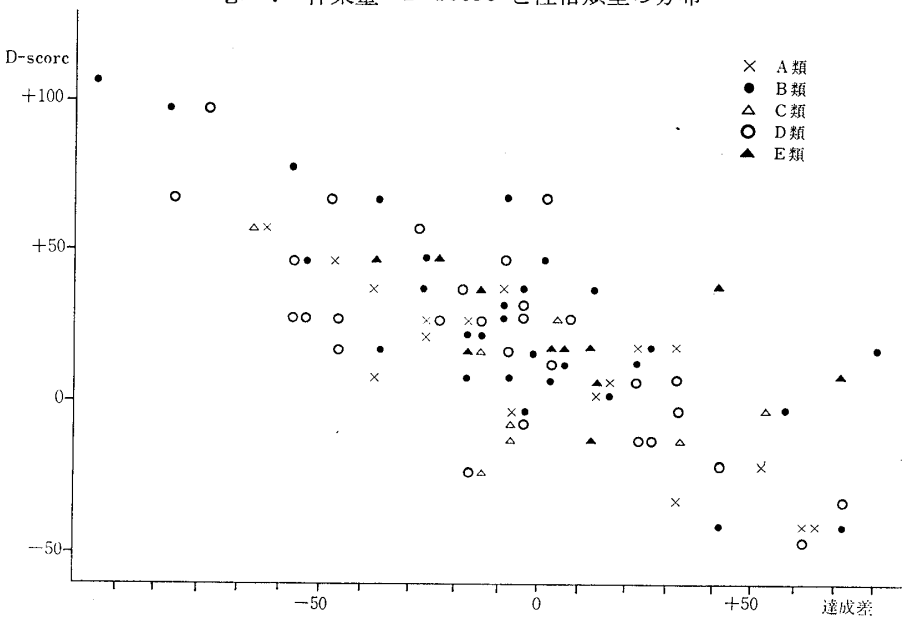

Fig. 2.　D-score・達成差と性格類型の分布

が，そのうちB類，D類がそれぞれ5名であり，積極型の反映と思われる。

③　消極型に属するC類，E類の作業量の分布の幅は，B，Dと比較すると小さく，作業量と目標差は負の期間の傾向を示す。とくに，Cのうちでも作業量の高い者が実際より低い予測値（−10〜−20）を設定している。

(3)　目標差，達成差，性格類型を関連させた場合には，

①　目標差がプラスで達成差がマイナスの者の中には，B，Dが多く，一応積極型と関係があると予想されるが，安定型と不安定型との差異はあらわれていない。

②①の逆のマイナスの目標差，プラスの達成差を示す者の中には，すべての類型が存在していて一定の傾向は見られない。

以上，要求水準と性格との間には，部分的に関連が見られるとはいえ，明確な答を出す段階ではないだろう。要求水準の実験事態の整備，因子水準での性格特性の分析が今後の課題である。

<参考資料B>

YG性格検査における性格類型

A類（平均型）

全くすべての性格特性について平均的な状態を示す人で，A型，A′型は万事につけて調和的適応的なタイプである。

B類（不安定積極型）

B型は情緒不安定，社会的不適応，活動的，外向的な人でパーソナリティの不均衡が外へあらわれやすい人で，暴発的行動に出やすい。B′型でもこの傾向はかなり強い。

C類（安定消極型）

いわゆるおとなしい消極的な安定した，もの静かな人であるが，活動性がなく内向的である点注意を要する。

D類（安定積極型）

この型の人は最も理想的な人格の持主で，情緒的にも安定し，社会的適応もよく，活動的で，対人関係もうまく行くタイプである。

E類（不安定消極型）

この型はD類の反対で，情緒不安定，非活動的，内向的で，E型及びE′型はノイローゼ傾向の強い人達である。

V．個別的考察

1．目的　先に報告された競争事態における理想水準結果下位者男子10名のうち現実，期待の両水準についても作業量が予想を下まわっている4名に関して個人別に検討する。

2．方法　各被験者の①学業成績　②体育科目成績　③知能偏差値　④Y−G性格検査について理想水準作業量上位者との比較をする。

3．結果　①A．Mの場合，全被験者111名のうち競争事態での作業量が最下位であった。A．Mは高校，大学を通じて野球を経験している。学業（大学1〜2年時）は理科目において4段階評価で2とされており，英語は3である。体育科目はサッカーが3，バスケットが2。対人技である柔道は履習していない。知能偏差値は65。YGはAB型と判定された。②M．Kは水泳を経験しており，理科目は3，英語3，サッカー・バスケットともに3。柔道は4と評価され，成績合計10（20点満点）。知能偏差値は48。YGはAC型。③K．Dは野球を経験しており，理科目は3，英語3。サッカー3。バスケット4。柔道は3と評価された。YGはAD型で知能偏差値は不明。④S．Eは高校時代，運動部に所属していない。理科目3。英語3。サッカー2。バスケット3で対人技の柔道は履習していない。S．Eは欠席が多く，知能偏差値，YGともに不明。出身高校からの報告では，学業，人物ともに低得点である。

男子上位者10名のうち現実水準の予測値と結果のズレの小なもの，および理想・現実・期待の3水準において作業結果が予想値を上まわっている者4名について下位者と対照させて述べる。①N．Mの場合，卓球を経験しており，学業成績は体育科目も含めて全て3であり，合計15（20点満点）。知能偏差値は

73で上位10名中最高。YGはE′型。②T．Sは陸上を経験しており，理科目・英語ともに3。体育科目はサッカー，バスケットともに4で，学業成績合計は18。知能偏差値は66。YGはAD型。③I．Cは陸上を経験しており，理科目，英語ともに3。サッカー2。バスケット3。柔道は4である。知能偏差値は50。YGはD′型。④T．Kは野球を経験しており，理科目は4。英語3。サッカー・バスケットともに3である。柔道は4。知能偏差値56。YGはC型と判定された。

体育科目成績について上－下位者各4名の平均値は11.0－7.50（16点満点）となるが，それぞれ10名の平均値には差がない。このことから競争事態での作業量の高低が，直接にスポーツ成績の高低を規定するものではなく，現実・期待両水準における正常反応を獲得することが規定要因となっていると考えられる。

Ⅵ．相関分析による考察

目的：内田クレペリン検査と矢田部ギルフォード（YG）検査の結果から，要求水準測度（今回は目標差）を線形回帰モデルにより推定する。

方法：(1) 内田クレペリン検査（25分法）の各分作業量を変数として因子分析（主因子解）を行なった。Scree test 及び因子の解釈可能性という2つの観点から因子の有意性を判定し，上位4因子までを採用した（寄与率合計94.7%）。それらの因子の解釈は次の通り；Ⅰ．加算速度或は数的能力の因子，Ⅱ．疲労因子，Ⅲ．エネルギー水準の因子，Ⅳ．興奮因子。これら4因子の因子得点を求めた（u_1～u_4）。

(2) YG検査の12個の尺度得点（D～S）を変数として因子分析（主因子解→規準バリマックス解）を行なった。(1)と同じ観点から因子の有意性を判定し，上位6因子までを採用した（寄与率合計74.6%）。それらの因子の解釈は次の通り：Ⅰ．情緒的安定性及び社会的適応性，Ⅱ．主導性（リーダーシップ），Ⅲ．思考的向性，Ⅳ．行動の積極性・計画性，Ⅴ．一般的活動性，Ⅵ．協調性。以上の6因子を充分として，それらの因子の因子得点を求めた（g_1～g_6）。

以上述べたu_1～u_4，g_1～g_6の合計10個の因子得点を，回帰分析のための予測変数として採用した。

(3) タッピング作業を用いた要求水準実験を行ない，そこで得られた目標差（予想値－直前の試行における作業量）を基準変数として採用した（α_1：利手・競争事態，α_2：逆手・個別事態）。

(4) 被験者は仙台大学の学生69名（女子3名）。実験及び検査は，昭和54年5月から7月にかけて，15～30名程度のグループごとに実施された。

結果：(1) 10個の因子得点とαの個別の相関係数は，最大でも0.272とかなり低い値を示した。従って，個々の因子得点から，αを線形モデルによって良好に予測することは無理である。因子得点とαの2次元プロットの視察によっても，有望な相関関係は認められなかった。

(2) 線形重回帰分析の結果も，それほど有望なものではなかった。重相関係数の値は0.45程度であった。このことは，10個の因子得点をどのように組み合わせてみても，充分な予測力を持つ合成変量は構成できないという可能性とともに，測定精度の向上とか，採用する因子の追加とか，因子得点の算出方法（今回は，誤差成分ϕと見做して因子得点を求めた）の変更といった処置によって，より予測精度のよい変量を構成できる余地もあることを示唆しているといえよう。断定的な解釈を下す前に，追加データを用いた cross validation が必要である。

Ⅶ．あとがき

仙台大学における体育心理学実験（2単位）は専門必修科目に指定されているので，履修者

は体育心理学専攻だけに限定されない。従って専門課程第3年次全員に対する卒業論文作成指導の予備段階にとどまる。つまり心理学の体系を追求するよりも体育全般にわたる教養の一環となるように準備される。

もともと〝動き〟を科学的にとらえるには体育学の各分野ともその実験器具を用意するために巨額の費用を必要とすることはいうまでもない。貧弱な本学の研究施設の中でも，特に当研究室では実験機器の整備に苦慮している。学生の期待に十分こたえることが困難で，物的な面で研究者の創意工夫にまたなければならないことが多い。

しかしながら，幸いにも実験指導を担当する人的スタッフには，研究室開設以来，ずーつと東北大・博士課程の若い学徒の応援を受けてきた。この研究ノートの執筆者はそれぞれが実験単元を受け持っているのである。

ここに東北大・教育心理学主任教授・宮川知彰先生の御厚意に深甚の謝意を表します。

最後に，われわれの研究室の10年の歩みに歴代の研究助手として尽力した5人の女史の氏名と現任地を誌して感謝に代えます。

初代：小熊順子（室蘭），　2代：西野美佐子（仙台），3代：荒川由美子（秋田），4代：中村美恵子（東京，5代：奥村桂子（塩釜）

＜敬称略＞

参考文献

J, B, Rotter; Level of Aspiration as a Method of Studying Personality (J. soc Psychol, 1945)

朴沢一郎・松井匡治；「運動選手の性格特性」（仙台大学紀要第1集・1969）

朴沢一郎（仙台大）・松井匡治（仙台大）
片岡　彰（東北大）・日下正一（長野県立短大）
長谷川啓三（東北大・院）鈴木敏明（東北大・院）

Personality and Level of Aspiration

Ichiro HOZAWA・Masaharu MATSUI・Akira KATAOKA
Shōichi KUSAKA・Keizo HASEGAWA・Toshiaki SUZUKI

Our seminar has reache the Ioth year of its establishment, therefore, we arrange data of "the speed of tapping" from among experimental units of the psychology of physical education in the last three years, and compare these data with experimental results of some other nnits, for instance, data of "Yatabe Guilford character tests."

Main purpose of this note is to present the research processes conerning the correlation betweon the so-called sportsmen's aptitude and the psychological tests. As stated in this reserch note, the relationship between level of aspiration and personality has been investigated from a different point of view. But the note come to no definite conclusion at present, because our investigation regarding its statistic validity is under way. So this note is an interim report, and presents some subjects of inquiry. We give a hearty reception to comment and advice about this note.